ヒ　シ

Trapa japonica

ヒシ科

ヒシ

名前の由来
ヒシは、水上に浮いている葉が菱形をしているところから付けられたという説と、果実が拉（ひし）げた形をしているところから付いたという説がある。逆に菱という形がヒシの葉からきているという説もある。
漢字名：菱

形態的特徴

根は池底の地中、茎は水中を伸びて葉を水面に浮かべる浮葉植物。茎の長さは水深によって大きく変化するが、長くて2m程度。葉は水面に出て放射状に広がってつく。茎から初めに出た外側の葉ほど葉柄が長く、あとから出てくる中心部の葉ほど葉柄が短い。葉柄は5～20cmで中央が膨らみ、スポンジ状となる。葉は卵状菱形、または菱状三角形で、長さ2.5cm～5cm、幅3cm～8cm、葉の上部の両縁に8～12対の不ぞろいだがはっきりとした鋸歯があり、裏面に微毛がある。花は一日花(主に日中に花が開き、夜に閉じる)で白色～微紅色。がく片と花弁は各4個、雄しべ4個。果実は、がく筒とがく片が変化して(大きくなる)形成される。果実の大きさは3～5cm、がく片4個のうち2個が発達してトゲになる。トゲの先端には細かい逆トゲがある。残りの2個のがく片は脱落するが、その跡がトゲのような突起に発達することもある。このトゲには細かい逆トゲがない。

開花。毎日開いては閉じる一日花

花が散り、がく片が落ち始める

2個のがく片とがく筒が残る

がく筒が膨らんでくると、実らしくなる

さらに大きくなり、がく片も丈夫になる

結実。完全に熟すと簡単に実が落ちる

類似種と見分け方

ヒメビシ、オニビシ。ヒメビシは葉も果実もヒシの半分程の大きさで、葉の裏面に毛は無く、果実には上向きのトゲが2個、下向きのトゲが2個ある。オニビシの果実はヒシより大型で、上向きのトゲが4個付いている。トゲが4個のヒシもあるが、ヒシと異なりどちらもトゲの先端には4つとも細かい逆トゲがあり、ヒシと区別できる。

生活サイクル

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
開　花　期												
結　実　期												

生育環境・分布

水深が2m池以内の湖沼や池に群生する。しばしば水面を覆いつくすように繁茂する。水際よりも、池の中心に近い部分に生育する傾向がある。

分布：国外分布は、朝鮮、ウスリー、中国大陸、インド、アフリカなど。

国内分布は、北海道、本州、四国、九州。

道内分布は、全道。

十勝地方では、湖沼や池で普通に見られる。

繁茂したヒシ。池沼一面を覆うことも

生活史

開花時期：7～9月　　**寿命**：1年草

開花までの年数：1年以内

他生物との関わり

マダラミズメイガ、ハムシ類の食草となる。

また、果実を食べにガン（雁）の一種であるヒシクイ（菱食）が訪れ、渡来当初に盛んにヒシの実を食べる。ヒシクイの名はヒシの実を食べることに由来する。ただし、ヒシクイはヒシの実だけを食べているのではなく、マコモなどの水生植物や畑の小麦の新芽なども食べる。

ヒシクイ。ヒシの実を好んで食べる渡り鳥

興味深い話

■十勝地方ほかのアイヌ語では（特に実を）「ペカンペ」という。「水上にあるもの」の意。

■アイヌの人々はヒシの実を採集し、乾燥させて保存したり、ご飯と混ぜて食べていた。ヒシの実は硬い殻に覆われ、中は白く、茹でるとクルミやクリに似た味がし、また、その茹で汁でアワを炊いた。滋養、強壮、消化促進の効果もあるとされている。ヒシの採集作業をモチーフにしたペカンペウク（ヒシの実採り）というロクウポポ（座り歌）が伝承されている。ヒシの実を食べる習慣はヒシが分布するアジア各地にあるという。

■ヒシは種子の先についた丈夫なトゲで、野鳥の羽にくっついて移動することがあると考えられている。発芽しているヒシの種子殻に、水鳥の羽毛が付いていた例があるほどヒシの種子には丈夫で強いトゲが付いている。

■葉は一日に一枚出て、一枚の葉の寿命は長くて30日ほど。新しい葉の葉柄は徐々に伸びるので古い葉を覆うことはなく、外側の古い葉から枯れて分離していく。葉柄の中央部は膨らんで、空気を蓄えて浮くのに便利なようになっている。

■猛暑の年には大繁茂し、1998年に兵庫県篠山市の篠山城跡の北堀でヒシが異常繁殖し、同町と商工会が除去作業を行い、約400トンのヒシを除去した例がある。

■昔、このヒシの実を忍者が使っていたという話もある。逃走時に使用していた「まきびし」の中には、ヒシの仲間のオニビシを用いていたといわれている。ヒシの実はトゲが2つであるのに対し、オニビシの実はトゲが4つあり、大きさもヒシより大きい。

完全に熟したヒシの実とその中身

葉柄のうきの断面。スポンジ状になっている

配慮事項

生育している環境全体が重要である。

参考文献

「日本の野生植物 草本Ⅱ」佐竹義輔・大井次三郎 他 平凡社 1982

「野草の名前　夏」高橋勝雄　山と渓谷社　2003

「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館 帯広百年記念館 2003

「川の生物図典」リバーフロント整備センター　山海堂　1996

「アイヌ植物誌」福岡イト子　草風館　1995

「名前といわれ 日本の野鳥図鑑2 水辺の鳥」国松俊英　偕成社 1995

「図説　日本鳥名由来辞典」柿澤亮三・菅原浩市　柏書房　1993

「原色日本野鳥生態図鑑(水鳥編)」中村登流・中村雅彦 保育社 1995

「ため池の自然―生き物たちと風景」浜島繁隆・土山ふみ・近藤繁生・益田芳樹　信山社サイテック　2001

「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館（編）、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会　2004

兵庫県篠山市公式サイト

http://www.city.sasayama.hyogo.jp/news/np981006.html